

ドメヌワインはテロワールが、ネゴスワインはナタリーのセンスが光る！

ナタリー・ゴビシェール (ドメヌ・ル・ブリゾー & ナナ・ヴァン)

生産地

ロワール地方は、トゥール市からナント市に向かうちょうどあいだの町シャトー・デュ・ロワールの手前を、東に5 km ほど、川に沿った農道を通り過ぎると、ナタリー・ゴビシェールのドメヌがあるマルソン村に着く。畑の総面積は9 haで、ドメヌのまわり半径5 km以内に複数点在し、大半が小高い丘の南向きの斜面に面している。土壌は、表面が主に粘土質と顆粒状のシレックスに覆われ、その土壌の下の部分(0.5 m~1.8 m)は石灰質、さらにその下はPerronsまたはPangeeと呼ばれる大昔まだ地球の大陸がひとつだった時(パンゲア大陸)の原岩盤が存在し、三層に折り重なっている。気候は穏やかで夏は暖かく、秋から冬春にかけてはロワール川(支流)と地上の温暖差で朝夕はしばしば深い霧に覆われ、その霧がブドウの貴腐化などの環境条件に影響を与える。また、ナナ・ヴァンのネゴスは、ラングドック地方のベジエ近郊北部の小さな村アスピランに醸造所があり、主にワイン生産者エミール・レディアのブドウを買いワインを仕込んでいる。(エミール・レディアはロワールにも畑があり、そこから時々ブドウを買っている)。夏の乾燥が著しい地中海性気候とタラモンターニュという季節風が、ブドウのカビや病気を防ぐ格好の条件をつくり出す。さらに、エミールの持つ畑は galets roules と呼ばれる力強いワインを生み出す楕円形の石の区画と旧火山からくる繊細なワインを生み出す玄武岩の区画の2つのテロワールがあり、それぞれ全く異なるワインの個性を生み出す。

歴史

現オーナーである、ナタリー・ゴビシェールは2001年にジュネーブの試飲会でクリスチャン・ショサールに出会う前は、スイスで劇団の女優をしていた。その当時から一般消費者としてヴァン・ナチュールに興味があり、特にクリスチャンのワインがお気に入りだった。ジュネーブの試飲会でクリスチャンに猛烈にアタックされたナタリーは、そのままクリスチャンと一緒にジャニエールに居を構えることを決意する。2002年にドメヌ・ル・ブリゾーを立ち上げ、そして2006年にはナタリーの愛称をから取ったナナ(ヴァン・エ・カンパニー)というネゴシアンも立ち上げる。当時ナタリーは主にドメヌの書類関係とネゴシアンワインの醸造に少しだけ携わっていた。だが、2010年に体調を崩したクリスチャンが末期ガンを患っていることを知って以降、畑から醸造までクリスチャンの行っていた仕事のほとんどをナタリーが代わりに行うことになった。そして、2年間畑と醸造に取り組んで仕事が慣れてきた頃、突然の不幸が訪れた。2012年の9月、不慮の事故によりクリスチャンが亡くなった。クリスチャンの亡き後ナタリーはそのままドメヌを引き継いだ。

2015年、元々友人だったワイン生産者エミール・レディアとネゴシアンの買いブドウを通じて懇意になり再婚を果たす。それを機に、ネゴシアンの醸造所をラングドックのエミール・レディア宅に移し、ナナ・ヴァンはラングドック、そしてドメヌ・ル・ブリゾーはロワールで仕込むという2つの場所を常に行き来しながらドメヌとネゴシアンを管理している。

生産者

現在、ナタリーは9 haのドメヌの畑と醸造+ネゴスワインの醸造の2つを管理している。2015年にロワールからラングドックに引っ越して以来、生活居住はラングドックに移ったが、ワインの状態を確認するためにロワールのドメヌには毎月3回以上出向いている。ドメヌの畑は、現在常時管理する従業員1人と旧カーヴを借りているワイン生産者カップルが賃貸の代わりに畑仕事に従事していて、離れていても日々常に連絡を取り合いながらお互いの意思疎通を図っている。彼女の所有するブドウ品種はシュナン、シャルドネ、ピノドニス、ガメイ、コー。ネゴシアンはテレット、サンソー、クレレット、シュナンを夫のエミール・レディアから買っている。ワインのスタイルは、ドメヌはクリスチャンの遺志を受け継ぎテロワールを重視したクリスチャンの味わい、そしてネゴシアンはナタリー自身のキャラクターを目指している。

ちょっと一言、独り言

「パタポン」で超有名なクリスチャン・ショサールが2012年にこの世を去り、心の準備がないままその後を継いだナタリー。クリスチャンを失う悲しみと不安をナタリーの口から直接聞いたことはないが、クリスチャンのドメーヌを継ぐ重圧は計り知れないものがあったに違いないだろう。

ナタリーはその不安やプレッシャーから明るさを失い、そんなナタリーにクリスチャンの代わりが務まるのかと、一時様々な噂が飛び交っていた…。

だが、2015年にエミール・レディアと結婚をし、南に移住して以来、彼女は重圧から少しずつ解放され、最近では本来の明るさを取り戻したように感じられる！現実問題、9 ha というブドウ畑を2児の母親が一人で管理し、生業としていくにはあまりにも厳しいことだと思う。しかしエミールと一緒に畑に出てから、彼女はエネルギーに溢れていて、彼女の復調と共にワインも輝きを放っている！ワインづくりにおいて、クリスチャンの経験値と比べればナタリーの年輪はまだまだ若いかもしれないが、すでに彼女にしか出せないキラキラした高品質のワインをつくり出しているように思える！

「2010年にクリスチャンが癌を患って以降、畑も醸造も実質私がほとんどの作業を行っていた」というナタリー。当時は、クリスチャンに負担をかけさせたくないという一心で、がむしゃらにトラクターにも乗ったり醸造を学んだり、それが今のワインづくりの全ての基礎となっているようだ。現在はワインの品質をさらに向上させるため、彼女は独自に色々なアイデアを取り入れている。畑作業には、パトリック・メイエーの提唱する刈らずにへし折って雑草の勢いを弱める「ルローファッカー」を新しく取り入れたりと、ブドウの木の間に多種多様な植物を植えたりと、ビオディナミではないがブドウの木の樹勢を高める工夫をしている。また、醸造においては、収穫したブドウを冷やすために冷蔵コンテナを設置したり、ブドウを長期間漬け込むロングマセラシオンを取り入れたりと、彼女自身の判断で積極的に新しことにチャレンジしている。ナタリーと親しいパスカル・ポテールやティエリ・ピュズラによると、クリスチャンは当時からナタリーのヴィニヨロンとしての素質をしっかりと見抜いていたようだ。

彼等曰く、クリスチャンが当時ネゴスのナナ・ヴァンを立ち上げたのは、彼女のワインのセンスを本当に見込んだことで、確かに、クリスチャンが一時期パタポンをガメイに変え、味わいの濃いスタイルにシフトしたことがあったが、それを100%ピノドニスでつくる昔のスタイルに戻したのはナタリーの提案からだった。彼女曰く「クリスチャンは私のテイस्टィングを本当に信頼してくれていた」と。

生前クリスチャンが「俺が亡くなっても、ヴァンクүүлはナタリーのことをしっかり頼むぞ！」と笑いながら言い残した時、グッと熱く高ぶる感情を抱いたが、今思えば「俺のイメージをいつまでも引きずらず、新しい生産者と新しい時代をつくって行け！」といった我々に対するメッセージが込められていたように思う。

クリスチャンの言葉を胸に、ヴィニヨロンとして覚醒していくナタリーの力になり、活躍をしっかりと見守っていきたい！！